

1. 第 2 回委員会での指摘に対する対応等

- ・ 洪水の少ない年は矢作ダムの排砂と阿摺ダムのフリーフローが一度も運用されなくなる。そういう年であっても、年 1 回は、排砂とフリーフローで土砂を出すような運用を考えたほうが良い。（資料-1 p4）
- ・ 最初の 30 年だけの中で閉じて議論するのではなくて、やはり越戸がある程度たまった後のフェーズではこのフラックスが全体としてどういうバランスになるのかを視野に入れながら 30 年より後のことも考える必要がある。（資料-1 p8～p12）

2. 矢作川上流区間における環境影響評価について

- ・ 河川区間ごとに、河床変動の予測結果と重ねあわせて、瀬・淵の特性をもう少し詳細に整理すべきである。（資料-2 p7）
- ・ 物理環境の変化の特性整理は、後の生物等の環境評価につながるようにまとめるべきである。昭和 48 年からの比較をし、余り変化がないというようなことになっているが、本当にそうなのか。その辺ももう少し細かな調査が必要である。（資料-2 p16）
- ・ 昭和 48 年ころの鱗状砂州の箇所はどのような場所であり、どう評価するのか。当時の自然に砂があった状態を基点とするのか、現状を基点とするのか等よく考える必要がある。（資料-2 p9）
- ・ 現状があってダム排砂という事業をやったときの環境影響だけでなく、矢作ダムができる前から考えてみて、ダムがどういうインパクトを与えてきたのかもじっくり見ておくということは、将来の総合土砂管理の視点からすると、一つのリファレンスになる。今後検討していくことが必要である。（資料-2 p9 ほか）
- ・ 昭和 48 年のような過去を基点と考えると、資料-2, p13 の典型種は、今の砂利や砂のない状態で生息しているものが典型種として挙げられているので、今後どういう河川環境を目指すのかにより挙げられる生物が異なると思う。（資料-2 p13）
- ・ 濁りについては、排砂をしてもあまり変わらないことを一般の方にわかりやすく説明できるようにする必要がある。例えば、ダム建設以前の濁度の資料があれば、現在のものと比較でき説得力がある。（資料-2 p38～p40）
- ・ 底生動物やカワシオグサにとっては、礫や砂がどれだけ動いているかが生息場として重要であるので、河床材料の更新に関する指標が必要である。堆積高の閾値については、計算結果と現地の状況がどのような対応関係になっているか、ハビタットの観点から整理することが必要ではないか。（資料-2 p43～p47）

- ・ 付着藻類は、増殖・剥離のみで現存量の変化を見ているが、アユに捕食されて減少するなど、アユとの関係も見べきである。すなわち、一つ一つのエレメントで評価するのではなくて、そのエレメントがどんなふうにつながっているのかという評価をしっかりとやって欲しい。(資料-2 p50～p52)
- ・ アユの遡上期に濁り等の影響が大きいのであれば、排砂シナリオに反映させないといけない。アユの産卵期に細かい砂が増えるのが悪影響であれば、次のステップでその時期に細かい砂を出さないようにする運用ルールを考えるべきである。(資料-2 p48～p54)
- ・ 一次元河床変動予測の堆積高の閾値(資料-2, p43) 15cm, 30cm が一体河床のどういう状態をあらわしているのか。また、そういう指標と生物との関係について、生物の先生の御意見を聞いてもう少ししっかり検討していく必要がある。(資料-2 p43～p47)
- ・ 一つ一つのイベントをもう少ししっかり見る必要がある。平均的にはクリアしていても、一つ一つのところでどんなことが起こっているかはきちっと見て欲しい。(資料-2 p43～p55)
- ・ 1年間全然洪水がなく、フラッシュをすることがないときには、何か代替のものをしておく必要がある。もう少しクリアな清流を出して河床を洗うなどの手当てを考える必要がある。粒度クラスをもう少しきちっとクラス分けして、その挙動をしっかりと見ること大切である。(資料-2 p43～p55)
- ・ どういうフレームで環境を評価していくかという決め方をその都度ある程度議論していかないといけない。評価軸についても同時並行で少し議論しておかないといけない。(資料-2 p17p～55)

3. 土砂バイパス施設について

(資料-2 p61～p83)

- ・ 「リスク発生時」の対応施設は、「トラブル発生時」の対応施設というべきものではないか。(リスクはずっと発生しているものである。)(資料-2 p66)
- ・ せっかくつくったトンネルを、毎年コンスタントに使えるようにする一つの方法論として、せっかく洪水が来ているのに土砂が流れないというとき、みすみす洪水を1回パスするのではなくて、そのときの流量を使って土砂を出すバックアップシステムがあるといい。(資料-2 p71～p72)
- ・ 流木や粗粒土砂の対策はかなり応用動作の部分かなという気がするので、やるやらないを今決めるのではなくて、いろんなアイデアを出して頂き、事務局で可能性とコストパフォーマンスを考えて頂く必要がある。(資料-2 p68～p70)
- ・ 年に7回も運用できれば十分であると思うが、稼働率がゼロという年が生じることは問題ではないか。少なくとも年に1回動かすにはどうすればいいかを考える必要がある。(資料-2 p80)

—以上—